

## 受け継ぐ文化を尊重する矜持と態度：世界地理的な 広がりと時間を積層する

知足, 美加子  
九州大学大学院芸術工学院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7172156>

---

出版情報：週刊読書人. 3442, 2022-06-03. 読書人  
バージョン：  
権利関係：



# 受け継ぐ文化を尊重する矜持と態度

世界地理的な広がりと時間を積層する

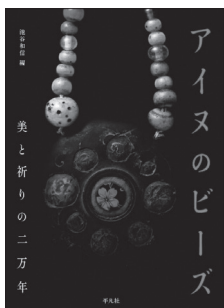
知足 美加子

池谷 和信編

## アイヌのビーズ

美と祈りの二万年

本書は「アイヌのビーズ文化における美と祈り」を核として、横軸にの形を、世界のビーズと世界地理的な広がりをもつという視点から探る試みである。池谷和信ほか二二間を積層している。アイヌ人の執筆者による考古



A5判・288頁・3740円  
平凡社  
978-4-582-83896-1  
TEL. 0570-045-820

る。縄文時代にビーズ素材として本州のヒスイやサハリンの碧玉がもたらされる。続縄文時代よりオホツク文化時代には中国産のガラス玉が北海道

に入ってくる。アイヌの「交易」によるグローバルなネットワークは、驚くほど広い。北海道の海洋河川を足場とする「漁猟民族」としてのアイヌの姿が立ち上がる。一三世紀（アイヌ文化時代）になると、本州からのガラスビーズや鉄器を組み合わせた首飾りのデザインが誕生する。江戸期のタマサイには「寛永通宝」といった銅貨が組み込まれたものも存在する。注目すべきは、「ものの伝来」によって新たな文化を創造し続けてきたアイヌの懐の深さである。遠くから運ばれてきたものの、受け継がれてきたものといった「移動空間や時間的経緯」を尊重し、価値としてきた文化的態度が見受けられる。

と、自由な創意工夫を許容する文化伝承のあり方が形となっていることに気づく。

ズはフチ達への敬意の象徴であり、文化継承の能動的動機となっている。押野朱美の論考には、祖母の冬子フチから「次はお前たちがアイヌ文化を大切にする番」とタマサイを受け継いだ経緯が述べられている。「アイヌ民族は今でもいるのですか？」という心ない質問があったとき、押野はタマサイを通じて家族のエピソードを伝え、自分の文化について「語りかけ」という。一粒の人間にある「歴史」がタマサイにこめられ、具体性を保ちながら次世代に伝承される印象的な場面である。これらの当事者の文章には、受け継ぐ文化を尊重するアイヌの矜持と文化的態度が現在も生きており、将来世代に伝わっていくことを予感させる。それは、本書がビーズに焦点を絞ったからこそ照らされた真実である。副題の「美と祈りの二万年」という言葉は、未来に向けられたものだったと読後に感じる本である。（ともたり・みかこ）九州大学教授・芸術学・彫刻）

地理的な広がりとして、北東アジアの少数民族コリヤークや北アメリカ先住民、台湾原住民族パイワン、アフリカの牧畜民サンブルのビーズ文化について紹介されている。現代におけるアイヌのアートシーンの紹介も興味深い。貝澤徹の蜘蛛の首飾り《ヤオシケブカムイ（蜘蛛の神様）》（二〇二一年）はモチーフの独創性とウロコ彫り伝統技法が組み合わされた見事な作品である。アイヌのビーズ作品を概観すると、文化多様性の受容

式は覚えなくていい」という白老アイヌの言葉は重く、彼らの苦難とビーズ文化財減少の背景が明らかに重要な部分である。一方で、アイヌ文化が力強く受け継がれることを予感させる記述もある。年齢を重ね（アイヌ文化を）よく知る人間でなければ「タマサイをつけても様にならない」とアイヌの女性が語る部分がある。彼女たちは、タマサイを身に着けたフチ（おばあさん）の姿に「憧れ」を抱いているという。アイヌのビーズはフチ達への敬意の象徴であり、文化継承の能動的動機となっている。押野朱美の論考には、祖母の冬子フチから「次はお前たちがアイヌ文化を大切にする番」とタマサイを受け継いだ経緯が述べられている。「アイヌ民族は今でもいるのですか？」という心ない質問があったとき、押野はタマサイを通じて家族のエピソードを伝え、自分の文化について「語りかけ」という。一粒の人間にある「歴史」がタマサイにこめられ、具体性を保ちながら次世代に伝承される印象的な場面である。これらの当事者の文章には、受け継ぐ文化を尊重するアイヌの矜持と文化的態度が現在も生きており、将来世代に伝わっていくことを予感させる。それは、本書がビーズに焦点を絞ったからこそ照らされた真実である。副題の「美と祈りの二万年」という言葉は、未来に向けられたものだったと読後に感じる本である。（ともたり・みかこ）九州大学教授・芸術学・彫刻）

★いけや・かずのぶ

国立民族学博物館人類学明誌研究部教授・環境人類学・人文地理学。著書に『トナカイの大地、クジラの海の民族誌』など。

週刊読書人2022年6月3日号

「週刊読書人」（<https://jinnet.dokushojin.com/>）という週間の新聞からの依頼で、書評を書いています。

23年前に、北海道二風谷でアイヌ民族に関するアートプロジェクトを行いました。その時設置した彫刻碑文に「受け継ぐ文化」という文言がありました。本稿につけてくださった見出しを嬉しく思いました。

「二風谷プロジェクト報告(1999年)」  
<https://www.design.kyushu-u.ac.jp/~tomotari/nibutanireport.html>

国立民族学博物館人類学明誌研究部教授・環境人類学・人文地理学。著書に『トナカイの大地、クジラの海の民族誌』など。